資料館ノート　第25号　　平成12年1月16日発行

都市化と消えゆく河川

江東区深川江戸資料館

江東区内を縦横に走る河川は、その殆どが江戸時代から開削が行われ、深川の人々の生活や産業、交通など、大きな役割を担ってきました。

しかし、戦後高度経済成長期の工業の発展と共に地盤沈下が進み、「江東ゼロメートル地帯」が増大しました。しかし、その後の急速な都市化・宅地化の進展に伴い多くの防災対策の点からも河川がその姿を消していきました。

1　水害都市江東

江東区域の歴史は、江戸以来水害との闘いの歴史であったといえます。江戸時代以来、水害によって庶民に与えた被害は相当なもので、長雨による洪水の他に、秋の台風シーズンには必ずと言っていいほど水が出て、家屋のみならず交通の要所でもある橋の破損・流失がありました。江戸時代の水害は67件あったとされ、約4年に1回の割合で発生していたことになります。その中でも、寛保2年(1742)の水害では隅田川の土手が決壊し、民家は3メートル近い水に浸かりました。幕府は御船手に救助船の出動を命じ、これによって救助された数3357人、助け船1218艘に及んだといわれます。この他にも、記録に残っていないものも多数あったと思われ、いかに水害が多かったかが窺い知れます。

波除碑（洲崎神社）
寛政6年（1792）建立。同3年に襲った高潮の大惨事が記されています。

2　外郭堤防と護岸

明治に入っても水害に悩まされ続け、まさに終りなき水との闘いでしたが、昭和9年(1934)東京市は護岸の改修事業に着手します。しかし、同24年のキティ台風がこれまでの計画を上回る潮位だったことや地盤沈下で既成護岸も沈下したため、本格的な外郭堤防の建設が始まります。同41年に江東デルタ地帯を堤防で囲み、水門と排水機場を設置した外郭堤防が完成します。これと並行して地盤沈下により川の水面より低くなった地域が区内の80%に達し、町を水害から守るため、繰り返し護岸の「かさあげ」も行われ

ました。現在でもその一部を見ることが出来ます。

3　木場の移転

明治維新の混乱もようやく落ち着き、材木商は東京材木問屋組合を結成し、木場の営業が復活しました。この時代、近代資本の材木業界への進出により、江戸以来の慣習は薄れていきました。その後、震災や戦災による苦難を乗越え、高度経済成長期に最盛を迎えましたが、地盤沈下や風水害による原木流出の危険等、木場の移転が問題視され、昭和47年(1972)から10年をかけて行われました。移転後の木場に直結していた内部河川の多くは、その使命を終えました。これにより、貯木堀は埋立てられ、多くの橋が姿を消していく中、当時の新聞に取り残された橋を題材にした「奇妙な橋」とうい記事が掲載され、陸地となった木場の荒涼とした風景が紹介されました。

木場公園に消えた橋
角兵衛橋・老松橋・山水橋・美芳橋・栗谷橋・寿橋・富島橋・福富橋・敷島橋・青海橋・太田 橋・扇森橋・万屋橋・海軍堀橋・亀居橋・幾代橋・範多橋・伊東橋・正平橋・栖原橋・松乃橋・鹿ノ子橋・雑治橋・若木橋・武市橋・中之橋・住吉橋・富田橋・繁栄橋

4　懐かしい川と橋

昭和初期における区内の河川は、大小合わせて30近く存在しており、その内の約3分の2が深川に集中していました。現在存在している川以外の主な川は、油堀川・八幡堀・古石場川・越中島川・洲崎川・福富川・五間堀川・六間堀川・矢竹堀・中之堀川、城東地区では境川・砂町運河・舟入川などがありました。この他にも、私有堀や国鉄所有の鉄道堀などもありました。

また、川には大小様々な橋が架けられていました。次に橋に関するエピソードを紹介しましょう。

［猿子橋］　六間堀にあった橋で、江戸時代母子の仇討ち事件がありました。

［繁栄橋］　木場の繁栄稲荷が由来。江戸一円の信仰を集め、たいへん賑わったことから、呼ばれるようになりました。

昭和30年頃の八幡堀と八幡橋の様子（江東区教育委員会蔵）
現在堀は緑地公園になり、橋は保存されています。

［丸太橋］　仙台堀川支川あった橋。江戸前期に元木場がありました。

［福島橋］　仙台堀川にあった橋で、現在バス停留所に名前が残っています。

［日曹橋］　南砂にあった私有水面にあった橋。バス停留所に名前が残っています。

5　よみがえる川

木場移転に伴い、多くの「不要橋」や「不要河川」が生まれ、消えていきました。このような中で、治水や利水の河川機能を失った河川については、埋立て・暗渠化整備や親水公園化整備などにより、河川として再生していきました。

現在、親水公園となっている主な川を紹介します。

［福富川公園］　筏の浮かぶ特性を生かしており、入口に吉岡水門が保存されています。

［木場親水公園］　大島川東支川と横十間川支川を整備。かつての木場の掘割りにあたります。

［仙台堀川公園］　河川の持つ水害の不安を解消するため、四ツ目通付近より小名木川までを整備しています。

また、護岸を改修して作られたギャラリーや川に沿った遊歩道など、現役の川も憩いの場として甦っています。